

Passivの本質について (その2) : 特にsein + zu + Infinitiv-Gefugeを中心に

その他のタイトル	Zum Wesen des Passivs (2.Teil) : besonders in bezug auf das sein + zu + Infinitiv-Gefuge
著者	寺川 央
雑誌名	独逸文学
巻	23
ページ	218-235
発行年	1979-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017797

Passiv の本質について (その二)

—特に sein + zu + Infinitiv-Gefüge を中心に—

寺 川 央

„Von hier aus *sind* die Wachttürme gar nicht *zu sehen!*“
antwortete eine der beiden Frauen.

(Aus: *Die Angst des Tormanns beim Elfmeter* Peter Handkes)

Abzugebende Vorgänge *sind* stets über die Registratur *zu leiten*.

(Aus: *Die deutsche Verwaltungssprache der Gegenwart* Hildegard
Wagners)

Wie *ist* es *zu formulieren* und wie *zu entscheiden*? Damit sind wir sofort mitten in einen Methodenstreit versetzt, in dem noch vieles *zu klären ist*.

(Aus: *Nennenswerte Sprachprobleme* Leo Weisgerbers)

sein+zu+Infinitiv-Gefüge は、ドイツ語のもつ、古い、そして今日では既に数多く用いられている、受動的で、しかも一定の様相性 Modalität の下で事象をいう一つの可能性であり、述語としてつくられると、sein+zu+Infinitiv となり、付加語的につくと、zu+Partizip Präsens (現在分詞；未完了分詞)、すなわちPartizip Futuri (未来分詞；zuをもつ未完了分詞) という形式をさしている。

いわゆる学校文法などでは、これについてはほとんどふれられることも少なく、また辞書類にもほんのその片隅にしか書きとめられていないようだが、たとえば最近の学術論文などでは各ページに二、三個は必ずとっていい程あらわれてくる。その他相当多くの文語に見受けられ、また近頃では、それまでにはなかったとされる口語の中にもかなり使用されていることは、たとえば、シェンタール (Schoenthal) の *Das Passiv in der deutschen Standardsprache*¹ が証するところである。

さて、この名称についてもブリンクマン (Brinkmann) は, haben+zu +Inf-Gefüge と共に、これを modale Infinitive として取り上げ², エガース (Eggers) は, modale Infinitivkonstruktionen des Typs er ist zu loben³, コルプ (Kolb) は, das Gerundivum⁴, ブリンカー (Brinker) は, das Gefüge sein+zu+Infinitiv⁵, ヘルビヒ (Helbig) やブッシュャ (Buscha) は, die Konstruktion mit sein+zu+Infinitiv⁶ などと様々な呼び方をしているが、それぞれの取上げ方も種々に異なっているようである。しかし、それをめぐる問題の主たるものとしては、Passivität について、Modalität についての二つを挙げうるのではないかと考える。

ところでパウル (Paul)⁷ やベハーゲル (Behagel)⁸ によれば、これはいわゆる未来分詞または受動分詞 Partizip Futuri oder Passivi から生じたとされている。そして西暦1600年以後になって、先ず公文書体の中にあられ、17世紀にはまだ全く稀にしか見られなかったが、18世紀以降、一般に文学的な散文や、学問的な文章の中に出て来るようである。だが、詩だとか、口語や日常語には依然として使われてはいなかったとされる。

その発端を形式についてみると⁹、動詞的中性名詞 Gerundium の ahd. ende(s)が、mhd.ではベハーゲルが *Geschichte der deutschen Sprache* でいうように¹⁰、語中音消失 synkopieren をして-ene (s) となり、更に spätmhd. では、-ene(s)、-ens と変ったその動名詞の三格 Dativ に経過を示す前置詞の ze が加わって、ze gebenne, ze lobenne となった、

その付加語的用法にみられるようである。これにはまたラテン語の受動的形容動詞 Gerundiv(um) の影響も指摘されているが¹¹、パウルの既にタツィアーン (Tatian) の例をひいて、これが必然性とか可能性をあらわすものであったことを述べている¹²。

この sein+zu+Infinitiv という形式は、今では殆どの学者や Informanten が、当然、動詞の複合形式 zusammengesetzte Verbformen とみているが、パウルはこれを受動的とは見なさず、レッシング (Lessing) の der Rath ist nicht übel, und zu befolgen の例を挙げて、言語感情からすると、これは一つの述語としてとらえられるとしている¹³。エガースも指摘するように¹⁴、全く興味深いことと思われるが、最近でもイエルゲンセン (Jørgensen) などがそのような解し方をしているようである¹⁵。

そこでまず受動性についてであるが、すでに本稿その一において述べたように¹⁶、かつては受動態を能動態の単なる裏返しとみていたのが、特に現代に至ってまことに様々の観点からその特性について考究されてきた。その中では、単に werden+Partizip II (完了分詞；過去分詞)、そして sein+Partizip II という形式、つまり動作受動と状態受動とよばれてきたものだけを受動として、その他を受動変形 Passivvarianten や受動の競合形式 Konkurrenzformen des Passivs を考えるプリンカーやヘルビヒの立場とは異なり、むしろヴァイスゲルバー (Weisgerber) の主張するように¹⁷、これを、行為者に向けられた素質 täterzugewandte Diathese としての能動に対する、いわゆる行為者から目をそらした素質 täterabgewandte Diathese としてとらえるのが、その本質を求めるのに正当ではないかと考える。メラー (Möller) も既に、*Guter Stil im Alltag* では¹⁸、「受動は、行為者或いは創始者、従って行為する、何かを惹き起す人を述べる必要がない時に用いる。つまり、その人が未知の人であったり、重要でない時、或いはおのずからわかっているという場合でもそれを述べる必要がない時である」といい、また、その結果の方が大切なのであって、

「その他、一つの行為を実行する人が、全くもって、始めに特に言われなくてもいいという時にふさわしい」としている。エガースは、何らかの動作主体 Agens が、現代ドイツ語の受動構成の中に出て来るのはきわめて稀なのだから、行為者から目をそらした素質というこの名称を、事物に向けられた素質 sachzugewandte Diathese といいかえることを提唱している¹⁹。別なことばでいえば、これはまたコルプが *Das verkleidete Passiv* であるように²⁰、「動詞の性の間の基本的な違いは、動詞の内容によってあらわされる事象の方向が対立している点」だとみることも出来、「この方向の違いが、時には、能動と受動を区別するただ一つの基準を示すということは、たとえば *das Lob des Freundes* という場合、その形式からすると全く同一でありながら、その方向の観点次第で、ある時は主語の二格 Genetivus subjectivus、つまりは *der Freund lobt* として、またある時には客体の二格 Genetivus objectivus、*der Freund wird gelobt* として理解される可能性」なのである。また、この werden+Partizip II、sein+Partizip II が、能動に対して比較的稀にしか用いられないことは、文学作品の中では、その定動詞全体の1.5%、学術的なものでは6.7%、大衆文学では1.2%、新聞では9%、いわゆる How to 物のような実用書では10.5%、全体では5.1%というプリンカーの調査した数字を、Duden 文法が引用している通りである²¹。しかし、受動の本質からみるならば、コルプが偽装した受動態 *das verkleidete Passiv* とみているものも含めて、実際には、はるかに多く、いわゆる事物に向けられた素質がひろがっているのに気付くのである。

受動が、新聞に執筆する人達によって特に好まれ、また行政に当たっている人もこれを多用し、更に科学論文などにも頻繁にあらわれることは、よく知られているが、メラーは、「日常語の、口頭でのドイツ語では能動が支配的なのに、報告、講演といった場合のドイツ語の中にも、既に深く受動が入りこんで来た」²²と述べ、また「受動構成は、行為者を背後に残し

ている。確かに受動の場合には、それを生じさせたファクターを挙げないでもそれで十分である。このような受動の文の持つ特性を、無意識的にせよ、意識的にせよ利用しているのが、事物をわざと幾らか不明瞭のままにさせておきたいと思っている人々なのだ²³ といい、また「受動は、時には、それらについて何かがいわれる、その人だとか対象を、一層強く認めさせるのに役立つ」とも述べている。

そこでこれを、たとえば行政で用いられることば *Verwaltungssprache* についてみると、ヴァーグナー (Wagner) は、その *Die deutsche Verwaltungssprache der Gegenwart* の中で、専ら西独における行政文書を調査しているが²⁴、約 1000 の文のうち、その四分の一以上、すなわち 260 の文が、werden または sein+Partizip II になっていて、つまり 26 % になると指摘している。これにプリンカーのいう *Passivvarianten*、*コルプ* のいう *passivnahe Verfahrensweisen* といった、その内容からみて受動的とされる 150 を加えると、4 割をこえるのだから、Duden の挙げている数字と比べると、この領域におけるその著しい多用ぶりが理解できるのである。しかもその中で、特にここである sein+zu+Inf. によるものを数えると、規範、規格を示すようなテキストに 124 例もみられる²⁵。これはつまり、行政において述べられるその多くについては、行為する人の方はその興味がないということである。執行する主体としての行政は、特に現代の民主主義とよばれる政治形態にある官僚組織の下では、執行される事物の背後に引きさがっている。つまり一つの行為と、その客体の実行がその興味の中心にあって、一方その行為の担当者から目がそらされる。

この点からみると、sein-Gefüge という形式は、その内容からすれば一人の個人に向けられるのではなくて、一定の行為を、一般の人に要求する、一般的な命令とみることができるところである。このような可能性が、sein+zu+Inf.-Gefüge のもつ特性の一つといえるのであって、指令を出

すものと受け取るものとの間の、それぞれの個人的な関係から目を転じさせ、更にそればかりか、実施する人とも無関係であって、ただその対象のみに目を注いでいるということになる。

ところでマッケンゼン (Mackensen) 以来²⁶、19世紀後半そして20世紀は das technische Zeitalter (技術の世紀)ともよばれているようだが、この技術というのは、その本質からして、数学的に見て明白であり、また計算可能なものによって作りだされ、そして任意に再生可能なものである。そしてまた連続と正確さが、工業生産の基本的法則であり、あらゆる技術的な処置とその応用は、いわばその正確さに基づいている。従って使用説明書だとか、教科書だとか、その機能の説明書といったものには、定義の上での飾りの無さ、そして明白性がのぞまれるのも当然である。それにもかかわらず、いやそれだからこそ、工業論文や技術書の中にも、受動構成が著しく多く、またこの sein+zu+Inf. も数多く見受けられるのである。誰が行なっても同じ結果が出るに違いないという可能性を示すためには、確かに、実験を行なう人が誰であるかは、その問題からはずされていなければならないからであろう。

この sein-Gefüge が新聞ドイツ語で多く用いられることも、これを仔細にみると、記事の種類によって著しい違いのあることに気付かれる。たとえば *Die Zeit* の一つをとってみても²⁷、その中で Weltpolitik mit Fanfarenstößen. Der amerikanische Präsident Carter auf Irrwegen という、いわば論説では、五つの sein-Gefüge を数えるのに対して、Ein Zeit-Interview mit Bundesinnenminister とか、Die Jerusalemer Springprozession には、全く見られないのである。

さて、Modalität (様相性、話法性) というのは、一つの発話に対して言語的にみとめられる評価であるとして、ブリンクマンは modal な (様相的) 表現の可能性を四つ挙げ、この様相の不定詞、動詞の話法、様相の助動詞、それに文の副詞 Modalwörter をそこに数えている²⁸。彼が、こ

の様相の不定詞として、始めて完了や受動と同様に、動詞的形式の体系における、一つの構成要素に入れたようであるが、この名称については、ツォルン (Zorn) は彼の *Semantisch-syntaktische Beobachtungen an den Fügungen „haben+zu+Infinitiv“ und „sein+zu+Infinitiv“* の中で、この不定詞が様相的なのではなくて、haben zu や sein zu が不定詞に様相的な色どりを与え、この構成全体の様相的な意味を生じさせているとして、これに反対しているようである²⁹。とにかく、この haben や sein をともなう様相的接合形式が、先のパウルの見解や、また学校文法で取り上げられることが少なかったという事実にもかかわらず、今では既に文法的に見て高度の安定性を持っていることは、特に立証する必要はないように思われる。

さて、プリンクマンは、この sein+zu+Inf. は、誰に対してその実現化が向けられようとしているかが未定のままになっているようなことを表現するのに適しているとして、Hunde sind an der Leine zu führen や、Die Straße ist wieder zu befahren の例を挙げているが³⁰、その機能として一般に認められているのは、1. 可能性、つまり Können であり 2. 義務、つまり Sollen であり、3. 要求、つまり Müssen である。だがこれらの様相性も、確かに一様には、すなわちそれぞれを一義的には判断できない。たとえば、プリンカーは、現代ドイツ語のその例証の約71%は、Können の様相性をあらわしているというが、それが人間以外の主体と結びついている時には、再帰的な lassen 構成と非常に近い関係にあることを指摘している³¹。つまり、Metaphysische Probleme sind nur mit den Mitteln der Wissenschaft der Metaphysik zu lösen→Metaphysische Probleme lassen sich nur mit den Mitteln der Wissenschaft der Metaphysik lösen. またプリンカーは、müssen/sollen の様相性を示すのは、その資料の中でおよそ21%だったことを報告し、Der Ausgang des Prozesses ist von dem Reporter Müller zu

beobachten のように、特にその動作主体の添加語のあるものがこれに入るとしている³²。

だが、そこにはコンテキストからもそれを決定しえないような、僅かともいえないグループの例証が残るのも事実である。実際には、この動作主体の添加語が来るというのは、非常に数少ない場合、また疑いの残る場合にのみ限られていて、現代の文語にはほとんど出て来ないといってもいいことは、エガースの例証101のうち4、プリンカーの398のうち7、筆者の調べたところでも123のうち5という調査結果からもうかがえるのである。プリンカーはそこで、動作主体の添加語がある時には、常にその様相性は Müssen だとみて、これを要求、或いは要請と解する一方、動作主体の添加語のない時の Können の様相性をもつ一部については、その受動性を疑っている³³。そもそも、プリンカーの立場からは本来、形式の上から定義された構成だけを受動とし、述部については受動形と取りかえが可能だがその他の文肢、特に主語はそのままというのは、受動変形だとみている。そこで能動の文の主語、つまり行為者は、受動になると、原則として von とか durch を伴う前置詞的な添加語の形式であらわれうるのだが、そのような箇所が具体的に示されているかどうかとは無関係に、さらには、いわゆる leere Stelle (空所) としてであろうと、それがこの受動の文の構造的完全性の一部をなしているとみるのである。従って Können の様相性をあらわす時には、受動変形ではなく、それは非受動、つまり能動となるにちがいないという。これに対してエガースは、ここへもし他の動作主体をいれるならば、たとえば Die Tür ist von allen/von jedermann zu öffnen のように、不定代名詞の動作主体が入ると、これはきまって Können の様相性となるではないかと反論している³⁴。また、どちらの様相性だとしても、殆んど例外なく動作主体なしで用いられていることが確かめられる以上は、この構造の重要さは、das Actum (行なわれたこと、行為) にあって、少なくとも der Actor (行為をする人) でないのは当

然だから、動作主体のない様相的な受動の文に変えるのは、どちらであっても可能だとしている。逆にいえば、この受動構造の中では、動作主体が欠けているのが普通であり、それを能動の文に変えることは可能だとしても、その場合、極めて不定な、一般的な意味の主語だけが許されるわけである。例えば Die Tür ist zu öffnen→*Man* kann/muß die Tür öffnen つまり、エガースのいう「事物に向けられた素質」, 「Actum に向けられた視点」ということになる。ついでながら、これに関してエガースが、現代ドイツ語の一定の種類のテキスト、たとえば哲学や人文科学の論文などでは、能動文の時でも、物の主語が Actor の主語よりも多くあらわれてくることを指摘しているのも³⁵、興味深く思われる。

Der deutsche Sprachbau を書いたソ連のアドモーニ (Admoni) は、様相の助動詞によってあらわされる様相性と、話法の中にあらわれる様相性とを適切に区別している³⁶。

すなわち、様相の助動詞のもつ様相性は、文の主語と、不定詞であらわされる行為、事象との間の関係が、どのように形成されるか、つまり論理・文法的 *logisch-grammatisch* な様相性であって、これに対し、動詞の話法は、あらわされている事象に対して話者がその中でとるそのやり方、特にこの事象の現実性の評価を意味している。従って伝達・文法的 *kommunikativ-grammatisch* な様相性だとするのである。*haben-Gefüge* と共に *sein+zu+Inf.-Gefüge* は、これによると、主語と、不定詞であらわされる出来事との関係だから、前者の論理・文法的な機能をもつといえよう。メチコーワ・アタナソーワ (Metschkowa-Atanassowa) は、*Synonymie zwischen der Konstruktion „haben+zu+Infinitiv“ und den Modalverben* の中で、この双方が同じ論理・文法的様相性であることから、その類似性と、その微妙な違いを細かく分析している³⁷。

たとえばその不定詞が、*leiden, verantworten, sich fügen* といった職業的な責務とか、道徳的もしくは日常的な義務をあらわしている場合

は、必然性を, *befehlen, bestimmen, fordern* のように、主語が、いわれているそのプロセスに対して権利があるのかないかという場合には、権能をあらわし, *fürchten, sich schämen* の場合には、それに対する理由、原因ということで必然性といったようなニュアンスを指摘している。ツォルンも不定詞による区別をとり上げて、*Solange er nicht geschieden ist, (a) hat er keinen Wohnraum zu verlangen/zu fordern (b) hat er keinen Wohnraum zu bekommen/zu erhalten (c) hat er keinen Wohnraum zu erwarten/abzugeben* というそれぞれの文で、(a)に対しては、一般的な必然性を確認し、(b)においては、可能性、(c)ではコンテキストがこれに加わらなければ、何れともきめられないとしている³⁸。

また最も広い意味で *wahrnehmen* という、*ansehen, anmerken, bemerken, erkennen, hören, vernehmen* は、原則として *Möglichkeit* ないしは *keine Möglichkeit* になり、*beurteilen, halten für* という意味での *ansehen, betrachten* は、ふつう *Notwendigkeit* ないしは *keine Notwendigkeit* とみられるようである。

だが他方、このような様相的な要素が弱められてしまっていたり、または完全になくなっている場合、つまり今日の言語慣用によっては、既に *Feste Fügungen* とみとめられるもののあることも事実である。たとえば、*Im Augenblick war ihm darum zu tun.* また、*Die Verhältnisse sind heute ganz anders. Damals hatte man es mit Ausbeutern und Faschisten zu tun. Da wußte man, was man zu tun hatte.*

とにかく、*sein+zu+Inf-Gefüge* の様相性を決定するには、やはり、不定詞の箇所を占めている動詞の意味論的考察と相 *Aktionsart* が問題であろうし、更には言語上のコンテキストや、そして言語外的な要素といった、その発話のいわゆる言語実用論 *Sprachpragmatik* からみる関係が必要という場合もあろう。言語上のコンテキストとしては、コルプはさら

に、付加語的な形式や位置をとると、それは、述語的なものよりももっと数多く Sollen もしくは Müssen をあらわすとして、der zu messende Vorgang は、先ずは der Vorgang kann gemessen werden という解釈を示唆する der Vorgang ist zu messen よりも大きい度合いで、der Vorgang, der gemessen werden soll/muß とみている³⁹。

またツォルンは、16000 ページにのぼる現代ドイツ語のテキストの中に出て来た4400以上のhaben+zu+Inf. と sein+zu+Inf.-Gefüge について、そのコンテキストから来る影響を調査している⁴⁰。それによると、否定の nicht, nicht mehr, kein の他、kaum, schwerlich, leicht, nur のような副詞や文の副詞を含んでいる文は、約80%の確率で、何らかの可能性をあらわしており、grundsätzlich, unverzüglich などのコンテキストを示す要素があれば、幾分その程度が弱められはするものの、それは必然性をあらわすとしている。

たとえば Der Betriebsleiter hat (*unverzüglich*) die Ursachen für den Unfall aufzudecken. しかし、こうした手がかりの他は、すべて推測によらねばならないことになる。そしてまた必然性にも、少なくとも Müssen と Sollen の二つの様相性の区別がのこされている。

そこでメチコーワ・アタナソワの挙げる haben-Gefüge と様相の助動詞の基本的な相違に目をとめると⁴¹、結局のところ、前者が、その様相的な価値を漠然とあらわすのであって、そのことからその伝達的效果は、様相の助動詞と比べて、ニュアンスや意味の構成要素をさらに追加的に含んでいることになる。そして主観的な解釈に自由な余地を許す、逆の立場からすれば、客観的にはあいまいさが可能ということになる。そしてまた、このような漠然とした辞義性 Lexikalität から、複合的な様相的意味内容をも表現できるとも言われている。コルプのいうように⁴²「まさにそれは、その性質からして、いくつかの様相性の間で揺れ動いている」のである。

ルートヴィヒ・ライナース (Ludwig Reiners の *Stilkunst*)⁴³ を、その後の文体の変化と結びつけようとしたザイフェルト (Seiffert) は、*Stil heute* の中では、それを Stil-Logik, Stil-Semiotik, Stil-Soziologie, Stil-Hermeneutik そして Text-Stilistik にわけているが、その Stil-Soziologie の章の冒頭で、「この章は、統一的な文体の規範というものは存在せず、時代や、空間や、集団という次元において、種々に異なった文体があるのだという事実に基づいている」⁴⁴ と書いている。確かに、彼がまた別の箇所でいうように、「単純に、抽象的な文体の理想を、例外なく、あらゆる領域や、あらゆる状況にあてはめてゆくことはできない。むしろ、文体論的な立場からすれば、いわゆる悪い言い回しだが、実際には、一そう具体的だということで、良い言い方だというような状況があるというのは、きわめてありうる」⁴⁵ のである。

既に述べたように、この sein+zu+Inf.-Gefüge は、その受動性からみると、受動の他の形式と比べても、行為者とは無関係に、ただその対象にのみ目を注ぐという、そしてまた不特定多数の名あて人 Adressaten を持つという特性を有し、またその様相性からみると、いわば、あいまいさを他の手段よりも多くもち、また複合的な様相的な意味内容をあらわしうるのであって、メチコーワ・アタナソワによれば、haben-Gefüge は、このあいまいさによって、特別な文体価値をもちうるというのだから、それと同じく、sein-Gefüge も、用いられる領域はやはり、それにふさわしい、いやむしろそれを必要とする、いわばその状況の中に求められるのであろう。

さて、直接的な命令法がないのが、行政で用いられることばの一つの特長だといわれるが、その理由は、ヴァーグナーによれば⁴⁶、「命令法は、本来広く口語に入るものだとすることによる」のであって、「命令法は、体験されている一つの状況の関係から出て来るのであり、要求として、直接そこに相対しているものだけに向けられる」からである。そしてもし個

人的に命令をすとしても、行政で用いられることばでは、さまざまな複雑な可能性をこめていいかえられる。つまり、「個人的な関係が、客観的な、制度的な事実の背後に退いて、このような調子のつよい人物や情況に結びつく言語形式よりも、一般化された、実質的な表現の方がよしとされる」⁴⁷⁾のである。だとすれば、まさにこの行政で用いられることば *Verwaltungssprache* の世界も、*sein-Gefüge* の活躍が期待できる領域であろう。コルプは、先の *Das verkleidete Passiv* の中で、いみじくも次のように述べている⁴⁸⁾。

「一般に、そしておおよそ言えることは、勧告的 *adhortativ* な意味でいわれる時には、この受動的形容動詞は、規則や法令の中にあって、(相対的必然をあらわす) *Sollen* の様相性では得心できないのだが、他方(絶対的必然をあらわす) *Müssen* の様相性をあからさまには告示したくないという行政のことばの、頻繁に出て来る、またその特徴的な構成要素なのである」(引用中 () 内は筆者により挿入)

東西ドイツの何れも、いわゆる民主主義を称え、かつての封建国家や専制国家とはちがって、常にその主権者たる人民、国民を意識にしている以上、ひよっとすると、このような *sein-Gefüge* のもつ文体的特長は、全くそうしたいわゆる民主主義国家の、特に西側の官庁文体にはうってつけともいえるのであろうか。

シュトルツ (Storz) は、*Situation und Sprache. Einige Bemerkungen* という論文の中で、「言語学は、既に長い間、職業語というものを認め、それを記述している。すなわち、一般に用いられ、また誰にわかることばからそれを切り離すこと、そしてそれを一つのグループの慣用語法として固定することは、確かに、絶えずくり返される一定の話の情況にさかのぼるのである」⁴⁹⁾と述べているが、官庁文体や新聞の文体もやはりこのような情況に、そしてそれに必要となる言語手段によって支えられているのであろう。

フライヤー (Freyer) は、*Die Situation der Bürokratie in der Mitte des 20. Jahrhunderts* で、「20世紀の産業社会のもつ、最も特長的な、何れにせよ、真先に目に入ってくるその目印は、恐らく、この産業社会にはあらゆる個所で、行政の公文書類が浸透しているということである」⁵⁰ といっている。これはつまり、このような sein+zu+Inf.-Gefüge の頻用という現象が現代の行政のことば、官庁文体、新聞の文体、そして学術論文、科学技術の論文等といった領域におけるその本質的な必然性、必要性から由来し、またそこで育ってゆく素質を有するものと見られるならば、トゥリーア (Trier) が、かつて1966年に、*Alltagsprache* (日用語) と題する講演⁵¹ の中で、実に見事に解き明かしているように、外国語の影響と並んで、他ならぬこうした学問のことば、行政のことば、法律用語、技術用語といった、いわば「権威ある」言葉の影響を、最もつよく受け易いのが、この日用語なのだから、すでに口語の中にまで das sein+zu+Inf.-Gefüge が入りこんでいるという先のシェンタールの確認もうなずけるのである。それに伴って、このような専門語、職業語のもつさまざまな特性までもが、言語生活のあらゆる分野にまで浸透してくることも、十分考えられるのではなからうか。

注

- 1 Gisela Schoenthal, *Das Passiv in der deutschen Standardsprache. Darstellung in der neueren Grammatiktheorie und Verwendung in Texten gesprochener Sprache. Heutiges Deutsch. Reihe I: Linguistische Grundlagen* Bd. 7. München 1976, S. 213.
- 2 Hennig Brinkmann, *Die deutsche Sprache*, Düsseldorf 1962 ; 2., neubearbeitete und erweiterte Auflage 1971, S. 363ff.
- 3 Hans Eggers, *Modale Infinitivkonstruktionen des Typs er ist zu loben*. In : *Sprache der Gegenwart* 24, *Linguistische Studien IV Festgabe für Paul Grebe zum 65. Geburtstag* T. 2. S. 39ff.
- 4 Herbert Kolb, *Das verkleidete Passiv. Über Passivumschreibungen im modernen Deutsch*. In : *Sprache im technischen Zeitalter* 19/1966 S. 173ff.
- 5 Klaus Brinker, *Das Passiv im heutigen Deutsch. Heutiges Deutsch*.

- Reihe I : *Linguistische Grundlagen* Bd. 2. München 1971, S. 121ff.
- 6 Gerhard Helbig u. Joachim Buscha, *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Leipzig 1972, 4., durchgesehene Aufl. 1977, S. 155f.
 - 7 Hermann Paul, *Deutsche Grammatik* IV, Tübingen 1920; Unveränderter Nachdruck der 1. Aufl. 1968, S. 119.
 - 8 Otto Behaghel, *Deutsche Syntax* II, Heidelberg 1924, S. 395f.
 - 9 Ebd., S. 395 und Paul, a. a. O., S. 95.
 - 10 Otto Behaghel, *Geschichte der deutschen Sprache*, Berlin und Leipzig 5. Aufl. 1928.
 - 11 Behaghel, *Deutsch Syntax* II, S. 396.
 - 12 Paul, a. a. O., S. 118.
 - 13 Ebd., S. 119.
 - 14 Eggers, a. a. O., S. 40.
 - 15 Peter Jørgensen, *Tysk Grammatik* B. 3, Kopenhagen 1964, S. 6.
 - 16 寺川央『Passivの本質について(その一)』関西大学『独逸文学19号』1974年105—120ページ
 - 17 Z. B. Leo Weisgerber, *Die vier Stufen in der Erforschung der Sprachen*, Düsseldorf 1963, S. 233ff.
 - 18 Georg Möller, *Guter Stil im Alltag. Eine neuartige Satzbauschule*. Leipzig, 1958, S. 94.
 - 19 Eggers, a. a. O., S. 45, Anm. 19.
 - 20 Kolb, a. a. O., S. 174.
 - 21 Brinker, a. a. O., S. 68f.; *Duden: Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*, 3. neubearbeitete und erweiterte Aufl. 1973, S. 92.
 - 22 Möller, a. a. O., S. 95.
 - 23 Ebd., S. 96.
 - 24 Hildegard Wagner, *Die deutsche Verwaltungssprache der Gegenwart*. Sprache der Gegenwart B. IX, Düsseldorf, 2. Aufl. 1972, S. 17.
 - 25 Ebd., S. 17f.
 - 26 Z. B. Lutz Mackensen, *Die deutsche Sprache in unserer Zeit. Zur Sprachgeschichte des 20. Jahrhunderts*. Heidelberg, 2., neubearbeitete Auflage 1971, S. 51ff.
 - 27 *Die Zeit*, Nr. 11, 4. März 1977.
 - 28 Brinkmann, a. a. O., S. 361ff.
 - 29 Klaus Zorn, *Semantisch-syntaktische Beobachtungen an den Fügungen „haben+zu+Infinitiv“ und „sein+zu+Infinitiv“* In : *Deutsch als Fremd-*

- sprache* 3/1977 14. Jg. S. 144.
- 30 Brinkmann, a. a. O., S. 365.
- 31 Brinker, *Zur Funktion der Fügung sein+zu+Inf. in der deutschen Sprache*. In: *Neue Beiträge zur deutschen Grammatik. H. Moser zum 60. Geburtstag gewidmet*. Mannheim, 1969 (*Duden-Beitrag* 37), S. 23.
- 32 Ebd., S. 26.
- 33 Ebd., S. 29.
- 34 Eggers, a. a. O., S. 41.
- 35 Ebd., S. 45, Anm. 19.
- 36 Wladimir Admoni, *Der deutsche Sprachbau*, Moskau/Leningrad 1966; 3., durchgesehene und erweiterte Auflage, München 1970, S. 165f.
- 37 S. Metschkowa-Atanassowa, *Zur Synonymie zwischen der Konstruktion „haben+zu+Infinitiv“ und den Modalverben*. In: *Deutsch als Fremdsprache* 2/1974 11. Jg. S. 106—110.
- 38 Zorn, a. a. O., S. 145.
- 39 Kolb, a. a. O., S. 194.
- 40 Zorn, a. a. O., S. 145.
- 41 Metschkowa-Atanassowa, a. a. O., S. 110.
- 42 Kolb, a. a. O., S. 195.
- 43 Ludwig Reiners, *Stilkunst. Ein Lehrbuch deutscher Prosa*. München 1953.
- 44 Helmut Seiffert, *Stil heute. Eine Einführung in die Stilistik*. München 1977, S. 95.
- 45 Ebd., S. 108.
- 46 Wagner, a. a. O., S. 21.
- 47 Ebd., S. 21.
- 48 Kolb, a. a. O., S. 194.
- 49 Gerhard Storz, *Situation und Sprache. Einige Bemerkungen*. In: *Die Wissenschaft von deutscher Sprache und Dichtung. Methoden-Probleme-Aufgaben. Festschrift für Friedrich Maurer zum 65. Geburtstag*. Stuttgart 1963, S. 181f.
- 50 Hans Freyer, *Die Situation der Bürokratie in der Mitte des 20. Jahrhunderts*. In: *Mitteilungen der Kommunalen Gemeinschaftsstelle für Verwaltungsvereinfachung Köln*, Sonderdruck Juni 1961, S. 5.
- 51 Jost Trier, *Alltagssprache*. In: *Die deutsche Sprache im 20. Jahrhundert*. Göttingen 1966, S. 110—133.

Zum Wesen des Passivs (2.Teil)

— besonders in bezug auf das
sein + zu + Infinitiv-Gefüge —

Nakaba Terakawa

Das sein+zu+Infinitiv-Gefüge ist eine alte Verbform, die aber erst in den neueren Zeiten öfters nicht nur in den Schriftsprachen wie in der Verwaltungs- und Rechtssprache, in den wissenschaftlichen oder technischen Texten, sondern auch teilweise in den mündlichen immer mehr eingetreten ist. Darauf richten die Stilisten und Grammatiker bisher ihre Aufmerksamkeit so selten, daß man bei den meisten Wörterbüchern oder Lehrtexten nur in den kleinen Ecken neben anderen Verbalfügungen wie haben+zu+Inf. usw. dieses Gefüge finden kann. In der Tat bemerkt man aber, wie obengenannt, daß es schon in die bestimmten Texten tief eingedrungen ist.

Syntaktisch und semantisch gesehen, dürften dabei zwei Blickrichtungen genannt werden, also die passivische und die modale.

Wenn man unter Passivität die sogenannte „täterabgewandte Diathese (L. Weisgerber)“ oder die „sachzugewandte Diathese“ (H. Eggers) versteht, müßte man so sagen, daß auch das sein-Gefüge unter dieser Perspektive steht. Infolge seiner Beschaffenheit, den Täter nur sehr spärlich zu nennen; dazu noch hat es gewöhnlich viele unbestimmte Adressaten. Vielleicht könnte man dort sagen, daß im Vergleich mit den anderen passivischen bzw. passivnahen Fügungen das sein+zu+Inf.- Gefüge mehr an einer besonderen Eigenschaft, also an der Anonymität von Täter und Adressaten hat.

Wenn man nun die Modalität des sein-Gefüges mit der des Modalverbs, das mit jenem eine logisch-grammatische Modalität

(W. Admoni) gemeinsam besitzt, genauer vergleicht, so müßte sich dazwischen, wie es die Belegen vom haben+zu+Infinitiv-Gefüge (Metschkowa-Atanassowa) schon klar gezeigt hat, trotz ihrer einigen Verwandtschaften mit den Modalverben ein großer Unterschied ergeben: Bei dem sein-Gefüge begegnet man vor allem seiner größeren Zweideutigkeit.

Nun gerade die Verwaltungssprache aber, in der das sein-Gefüge sehr oft erscheint, sollte diese Zweideutigkeit einerseits und jene Anonymität des Täters andererseits verlangen und sie für sich gern benutzen. Auch bei den anderen Fachsprachbereichen wie wissenschaftlicher oder technischer Sprache stünde die Sache fast gleich.

Schon 1967 hat Jost Trier in seinem Vortrag „Alltagssprache“ mit Recht gezeigt, daß die Alltagssprache leicht zu bewirken ist eben von der Amts- und Rechtssprache, von der wissenschaftlichen oder technischen Sprache.

Dann könnte man wohl vermuten, daß das sein+zu+Infinitiv-Gefüge, wenn es bereits in diese Sprachbereiche eingedrungen ist, sich bald über die Alltagssprache auf alle Ebenen der Sprache, sowohl der schriftlichen als auch der mündlichen, ausdehnen würde.